

著者のホンネ

これが本当に最後の経済小説
人生で五指に入る人物描いた

これまで多くの企業・経済小説を書いてきた中で、新著の主人公はITベンチャー企業であるイーパーセルの北野譲治社長でした。米グループを特許侵害で訴え、勝利を収めたとはいえ、知る人ぞ知る企業と経営者です。筆を執ることになった経緯を教えてください。

2017年4月に出た「産経新聞」の記事がきっかけです。そこで北野さんが紹介されていました。読んですぐに会いたいと思って、自分で会社に電話をかけて、数日後には本人に会いました。

実は、周囲には企業・経済小説は前作の『最強の経営者』（アサヒビルの中興の祖といわれる樋口廣太郎氏を描いた作品）が最後だと話していましたし、昨年は手術のため3度も入院しました。加齢黄斑変性で視力が低下したので、眼科医からは「今後は口述筆記でしょうね」とも言われました。

それに、初めて扱う題材でしたし、「IT」と聞いただけで尻込みするところもありました。それでも、北野さんに会って話

Masato Kato



1939年東京生まれ。業界専門紙「石油化学新聞」の記者・編集長を経て、75年『虚構の城』で作家デビュー。『金融腐蝕列島』シリーズなど、取材に基づく企業・経済小説を多数発表。近著に初の自伝的小説『めぐみ園の夏』がある。

作家
高杉良



『雨にも負けず
小説ITベンチャー』
高杉良著
(角川書店 1600円)

を聞いていたら、「これは書かざるを得ない」「本当にこれが最後だ」と思うようになりました。幼いころから恐怖心より好奇心が勝っていました。今度も同じです。

なぜそこまで心を動かされた人物の中で似ている人はいませんか。また、今まで出会った

北野さんの行動力や頭脳明晰さ、恩人たちの巡り合わせなどには、取材していて元氣と勇氣をもらいました。これほど魅力を感じた人はいません。これまで記者や作家として多くの人に取材してきましたが、

その中でも五指に入る人物ではないかと思えます。

似ているのは『組織に埋れず』で書いた元JT Bの（伝説的ヒットメーカー）大東敏治さんでしょうか。彼に匹敵するくらい行動力があって、自分で考えて問題を解決していくところが似ていると感じますね。それと、2人とも失敗も結構してありますが、包み隠さず話してくれる明るさも同じです。

私は今の時代は人の気持ちが悪んでいるように感じています。そんなときにこの本を読んで、北野

さんのような人が現に頑張っていることを知れば、私と同じように勇気づけられる。つらい思いをどのようにしのいでいったかを感じることができると。そう思うので、大変でしたが書き上げて本当によかったと思っています。

「これが最後」というお話がありました。今興味がある企業や経営者はいないのでしょうか。

今は思い浮かびませんね。先日80歳を迎えましたし、企業・経済小説としては本当に最後でしょう。ただし、自伝的小説として書いた『めぐみ園の夏』の続編は書くつもりです。先日、息子から「親父の責務だと思おう」とも言われませんでしたから。

「石油化学新聞」で記者をしていた時代について描きたいと考えています。高度経済成長期における通産省（通商産業省、現経済産業省）と化学業界の関係などについて思いをめぐらせています。